

吾輩ハ猫デヤ



夏目漱石著

吾輩ハ猫デス



夏目漱石著

新選 名著複刻全集 近代文学館

昭和55年10月10日 印刷
昭和55年10月20日 発行
(第20刷)



夏目漱石著

吾輩ハ猫デアル (上編)

大倉書店・服部書店版

刊 行	財団法人 日本近代文学館 東京都目黒区駒場4-3-55 代表者 小田切進
編 集	名著複刻全集編集委員会 代表者 稲垣達郎
総発売元	株式会社 ほるぶ 東京都新宿区新宿2-19-13 代表者 中森蒔人
製 作	株式会社 ほるぶ出版 東京連合印刷株式会社

このページ(表・裏)は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

序

「吾輩は猫である」は雑誌ホト、ギスに連載した續き物である。固より纏つた話の筋を讀ませる普通の小説ではないから、どこで切つて一冊としても興味の上に於て左したる影響のあらう筈がない。然し自分の考ではもう少し書いた上でと思つて居たが、書肆が頻りに催促をするのと、多忙で意の如く稿を續ぐ餘暇がなので、差し當り是丈を出版する事にした。

自分が既に雑誌へ出したものを再び單行本の體裁として公にする以上は、之を公にする丈の價值があると云ふ意味に解釋されるかも知れぬ。「吾輩は猫である」が果してそれ丈の價值があるかないかは著者の分として言

ふべき限りでないと思ふ。たゞ自分の書いたものが自分の思ふ様な體裁で世の中へ出るのは、内容の價值如何に關らず、自分丈は嬉しい感じがする。自分に對しては此事實が出版を促がすに充分な動機である。

此書を公けにするに就て中村不折氏は數葉の挿畫をかいてくれた。橋口五葉氏は表紙其他の模様を意匠してくれた。兩君の御蔭に因つて文章以外に一種の趣味を添へ得たるは余の深く徳とする所である、

自分が今迄「吾輩は猫である」を草しつゝあつた際、一面識もない人が時々書信又は繪端書杯をわざ／＼寄せて意外の褒辭を賜はつた事がある。自分が書いたものが斯んな見ず知らずの人から同情を受けて居ると云ふ事

を發見するのは非常に難有い。今出版の機を利用して是等の諸君に向つて一言感謝の意を表する。

此書は趣向もなく、構造もなく、尾頭の心元なき海鼠の様な文章であるから、たとひ此一卷で消えてなくなつた所で一向差し支へはない。又實際消えてなくなるかも知れん。然し將來忙中に閑を偷んで硯の塵を吹く機會があれば再び稿を續ぐ積である。猫が生きて居る間は——猫が丈夫で居る間は——猫が氣が向くときは——余も亦筆を執らねばならぬ。

明治三十八年九月

夏目漱石



（第二）

夏目漱石

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頼と見當がつかぬ。何ても暗薄いじめじめした所でニャー泣いて居た事丈は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあとで聞くとそれは書生といふ人間で一番癡惡な種族であつたさうだ。此書生といふのは時々我々を捕へて煮て食ふといふ話である。然し其當時は何といふ考もなかつたから別段恐しいとも思はなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフハフハした感じが有つた許りである。掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たが所謂人間と

いふものゝ見始であらう。此の時妙なものだと思つた感じが今でも残つて居る。第一毛を以て裝飾されべき筈の顔がつる／＼して丸て藥罐だ。其後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出會はした事がない。加之顔の真中が餘りに突起して居る。そうして其穴の中から時々ぷう／＼と烟を吹く。どうも咽せぼくて實に弱つた。是が人間の飲む烟草といふものである事は漸く此頃知つた。

此書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つて居つたが、暫くすると非常な速力で運轉し始めた。書生が動くのか自分丈が動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思つて居ると、どさりと音がして眼から火が出た。夫迄は記憶して居るがあとは何の事やらいくら考へ出さうとしても分らない。

ふと氣が付いて見ると書生は居ない。澤山居つた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さへ姿を隠して仕舞つた。其上今迄の所とは違つて無暗に明るい。眼を明いて居られぬ位だ。果てな何でも容子が可笑いと、のそ／＼這ひ出し

て見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

漸くの思ひで笹原を這ひ出すと向ふに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考へて見た。別には是といふ分別も出ない。暫くして泣いたら書生が又迎に來てくれるかと考へ付いた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たが誰も來ない。其内池の上をさら／＼と風が渡つて日が暮れかゝる。腹が非常に減つて來た。泣き度ても聲が出ない。仕方がない。何でもよいから食物のある所迄あるかうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くと漸くの事で何となく人間臭ひ所へ出た。此所へ這入つたら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もし此竹垣が破れて居なかつたなら、吾輩は遂に路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。此垣根の穴は今日に至る迄吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつて居る。偕邸へは忍び込んだもの

の是から先どうして善いか分らない。其内に暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降て來るといふ始末でもう一刻も猶豫が出來なくなつた。仕方がないから兎に角明るくて暖かさうな方へ方へとあるいて行く。今から考へると其時は既に家の内に這入つてたのだ。こゝで余は彼の書生以外の人間を再び見るべき機會に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。是は前の書生より一層亂暴な方で我輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いや是は駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せて居た。然しひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出來ん。吾輩は再びおさんの隙を見て臺所へ這ひ上つた。すると間もなく又投げ出された。吾輩は投げ出されては這ひ上り、這ひ上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶して居る。其時におさんと云ふ者はつく／＼いやになつた。此間おさんの三馬を偷んで此返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出され様としたときに、此家の主人が騒々しい何だといひながら出て來た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けて

此宿なしの小猫がいくら出しても出しても御臺所へ上つて来て困りますといふ。主人は鼻の下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔を暫らく眺めて居たが、やがてそんなら内へ置いてやれといつたまゝ、奥へ這入つて仕舞つた。主人は餘り口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しさうに吾輩を臺所へ抛り出した。かくして吾輩は遂に此家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師ださうだ。學校から歸ると終日書齋に這入つたぎり殆んど出て來る事がない。家のものは大變な勉強家だと思つて居る。當人も勉強家であるかの如く見せて居る。然し實際はうちのものがいふ様な勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく晝寐をして居る事がある。時々讀みかけてある本の上に涎をたらして居る。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて彈力のない不活潑な徴候をあらはして居る。其癖に大飯を食ふ。大飯を食つた後で「タカチャスターゼ」を飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ讀むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。是が彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は

猫ながら時々考へる事がある。教師といふものは實に樂なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寐て居て勤まるものなら猫にでも出來ぬ事はないと。夫でも主人に云はせると教師程つらいものはないさうで彼は友達が來る度に何とかゝんとか不平を鳴らして居る。

吾輩が此家へ住み込んだ當時は、主人以外のものには甚だ不人望であつた。どこへ行つても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。如何に珍重されなかつたかは、今日に至る迄名前さへつけてくれないのでも分る。我輩は仕方がないから、出來得る限り我輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が晝寐をするときは必ず其脊中に乗る。是はあながち主人が好きといふ譯ではないが別に構ひ手がなかつたから已を得るのである。其後色々經驗の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は椽側へ寐る事とした。然し一番心持の好いのは夜に入つてこゝのうちの小供の寐床へもぐり込んで一所にねる事である。此小供といふのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入つ

て一間へ寐る。余はいつでも彼等の中間に己れを容るべき餘地を見出してどうか、かうにか割り込むのであるが運悪く小供の一人が眼を醒ますが最後大變な事になる。小供は――殊に小さい方が質がわるい――猫が來た――といつて夜中でも何でも大きな聲で泣き出すのである。すると例の神經胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現に先達て杯は物指で尻ぺたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればする程、彼等は我儘なものだと斷言せざるを得ない様になつた。殊に吾輩が時々同衾する小供の如きに至つては言語同斷である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり。頭へ袋をかぶせたり。抛り出したり。へっつ―いの中へ押し込んだりする。而も我輩の方で少しでも手出しを仕様ものなら家内總がゝりて追ひ廻して迫害を加へる。此間も一寸疊で爪を磨いたら細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。臺所の板の間で他が顛へて居ても一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君杯は逢ふ度毎に人間程不人情なものはないと言つて居

らるゝ。白君は先日玉の様な猫子を四疋産まれたのである。所がその家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持て行つて四疋ながら棄てゝ來たさうだ。白君は涙を流して其一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戰つて之を剿滅せねばならぬといはれた。一々尤の議論と思ふ。又隣りの三毛君は人間が所有權といふ事を解して居ないといつて大に憤慨して居る。元來我々同族間では目刺の頭でも鰯の臍でも一番先に見付たものが之を食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手が此規約を守らなければ腕力に訴へて善い位のものだ。然るに彼等人間は毫も此觀念がないと見えて我等が見付た御馳走は必ず彼等の爲に掠奪せらるゝのである。彼等は其強力を頼んで正當に吾人が食ひ得べきものを奪つて澄して居る。白君は軍人の家に居り、三毛君は代言の主人を持つて居る。吾輩は教師の家に住んで居る丈、こんな事に關すると兩君よりも寧ろ樂天である。唯其日／＼が何うにか斯うにか送られゝばよい。いくら人間だつて、さういつ迄も榮へる事もあるまい。まあ氣を永く猫

の時節を待つがよからう。

我儘で思ひ出したから一寸吾輩の家の主人が此我儘で失敗した話をし様、元來此主人は何といつて人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほといぎすへ投書をしたり、新體詩を明星へ出したり、間違ひだらけの英文をかいいたり、時によると弓に凝つたり、謠を習つたり、又あるときはヴィオリン杯をブー／＼鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつて居らん。其癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謠をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられて居るにも關せず一向平氣なもので、矢張是は平の宗盛にて候を繰返して居る。皆んながそら宗盛だと吹き出す位である。此主人がどういふ考になつたものか吾輩の住み込んでから一月許り後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあはたゞしく歸つて來た。何を買つて來たのかと思ふと水彩繪具と毛筆とワットマンといふ紙で今日から謠や俳句をやめて繪をかく決心と見えた。果して翌日から當分の間といふものは毎日々々書齋で晝寐もしないで繪

許りかいて居る。然し其かき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。當人もあまり甘くないと思つたものか、ある日其友人で美學とかをやつて居る人が來た時に下の様な話をして居るのを聞いた。

「どうも甘くかけないものだね。人を見ると何でもない様だが自ら筆をとつて見ると今更の様に六づかしく感ずる。是は主人の述懐である。成程詐りのない處だ。彼の友は金縁の眼鏡越に主人の顔を見ながら、さう初めから上手にはかけないさ。第一室内の想像許りで畫がかける譯のものではない。昔し以太利の大家アンドレア・デルサルトが言つた事がある。畫をかくなら何でも自然其物を寫せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然は是一幅の大活畫なりと。どうだ君も書らしい畫をかゝうと思ふならちと寫生をしたら」

「へえアンドレア・デルサルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかつた。成程こりや尤もだ。實に其通りだ」と主人は無暗に感心して居る。金縁の裏には嘲ける様な笑が見えた。

其翌日吾輩は例の如く椽側に出て心持善く晝寐をして居たら、主人が例になく書齋から出て来て吾輩の後ろで何かしきりにやつて居る。不圖眼が覺めて何をして居るかと一分許り細目に眼をあけて見ると、彼は餘念もなくアンドレア、デルサルトを極め込んで居る。余は此有様を見て覺えず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に揶揄せられたる結果として先づ手初めに吾輩を寫生しつゝあるのである。我輩は既に十分寝た。欠伸がしたくて堪らない。然し切角主人が熱心に筆を執つて居るのを動いては氣の毒だと思ふて、ぢつと辛棒して居つた。彼は今我輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩つて居る。我輩は自白する。我輩は猫として決して上乘の出来ではない。脊といひ毛並といひ顔の造作といひ敢て他の猫に勝るとは決して思つて居らん。然しいくら不器量の我輩でも、今我輩の主人に描き出されつゝある様な妙な姿とは、どうしても思はれない。第一色が違ふ。我輩は波斯産の猫の如く黄を含める淡灰色に漆の如き斑入りの皮膚を有して居る。是丈は誰が見ても疑ふべからざる事實と思ふ。然るに今主人の彩色を見ると、黄で